



木山ビジョン 2026



木山仮設団地跡地における暮らしの拠点づくり計画



目 次

CONTENTS

木山ビジョン

CHAPTER 1	ビジョンの概要	P2
CHAPTER 2	ビジョンの基本的な考え方	P7
CHAPTER 3	益城町の現在地／これまでの歩み	P11
CHAPTER 4	益城町／木山地区の課題	P16
CHAPTER 5	目指したい姿	P22

木山仮設団地跡地における暮らしの拠点づくり計画

CHAPTER 6	木山ビジョンを踏まえた、木山仮設団地跡地のあり方	P28
CHAPTER 7	エリアの将来イメージ	P33
CHAPTER 8	事業の実現に向けて	P39

Chapter

1

ビジョンの概要

1 ビジョン策定の背景

益城町の中心部に位置する木山地区は、行政機能や公共施設などが集まる町の中核として、町民の暮らしを支える都市拠点の役割を担ってきました。今後、社会環境の変化が進む中においても、木山地区が人々の交流や活動の拠点としての役割を高めていくことは、町全体の活力や持続的な発展を目指すうえで重要と考えます。

また、木山地区は熊本地震により大きな被害を受けた地域でもあり、復興の歩みの中で得られた経験や教訓を次の世代へ継承していくことが重要です。日常の暮らしの豊かさと、非常時における支え合いの仕組みが両立するまちの姿を示していくことも、これからの地域づくりにおいて大切な視点となっています。

こうした背景を踏まえ、益城町では、将来を見据えながら、木山地区全体の将来像と取り組みの方向性を町民・事業者・行政が共有し、公民連携のもとで持続可能なまちづくりを推進していくためのよりどころとして、本ビジョンを策定することとしました。

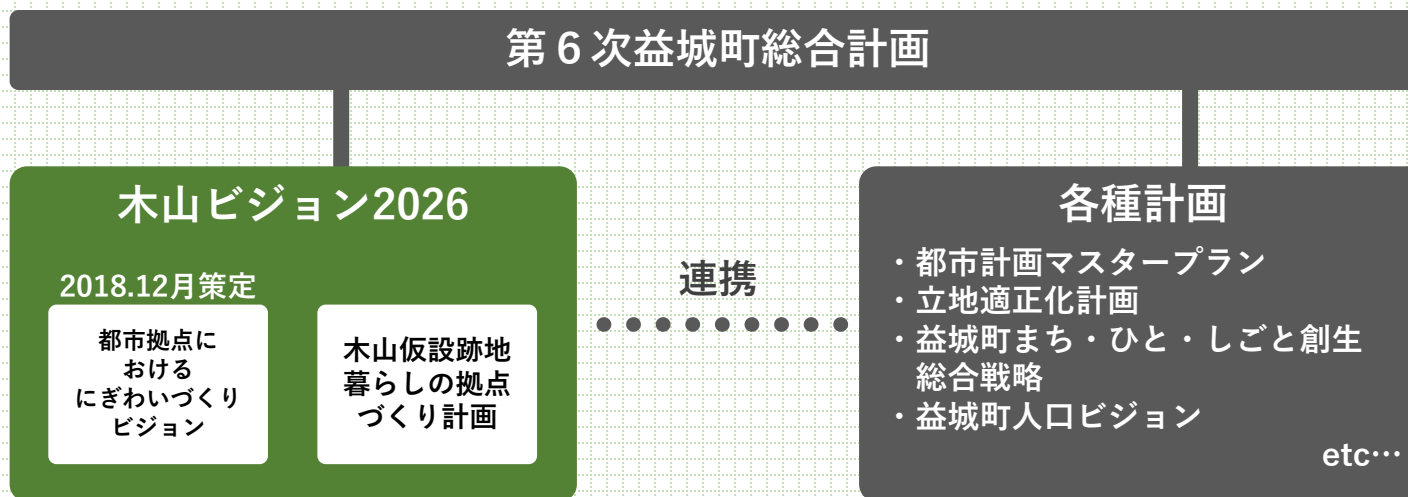
そのうえで、木山仮設団地跡地は、木山地区の未来像を具体的なプロジェクトとして形にし、町内外に発信していくためのひとつの核となるフィールドです。平時は心地よい日常の居場所として、災害時には支え合いの拠点として機能する“フェーズフリー”の考え方も踏まえ、この核となるエリアだけでなく、木山地区全体が連動するような“暮らしの拠点づくり”を進めていきます。

1 ビジョンの位置づけ

エリア全体のビジョンと中核プロジェクトの2本柱

本ビジョンは、木山地区全体の将来像と取り組みの方向性を共有する“将来ビジョン”であると同時に、木山仮設団地跡地における具体的なプロジェクトを示す“拠点づくり計画”を兼ね備えた構成になっています。

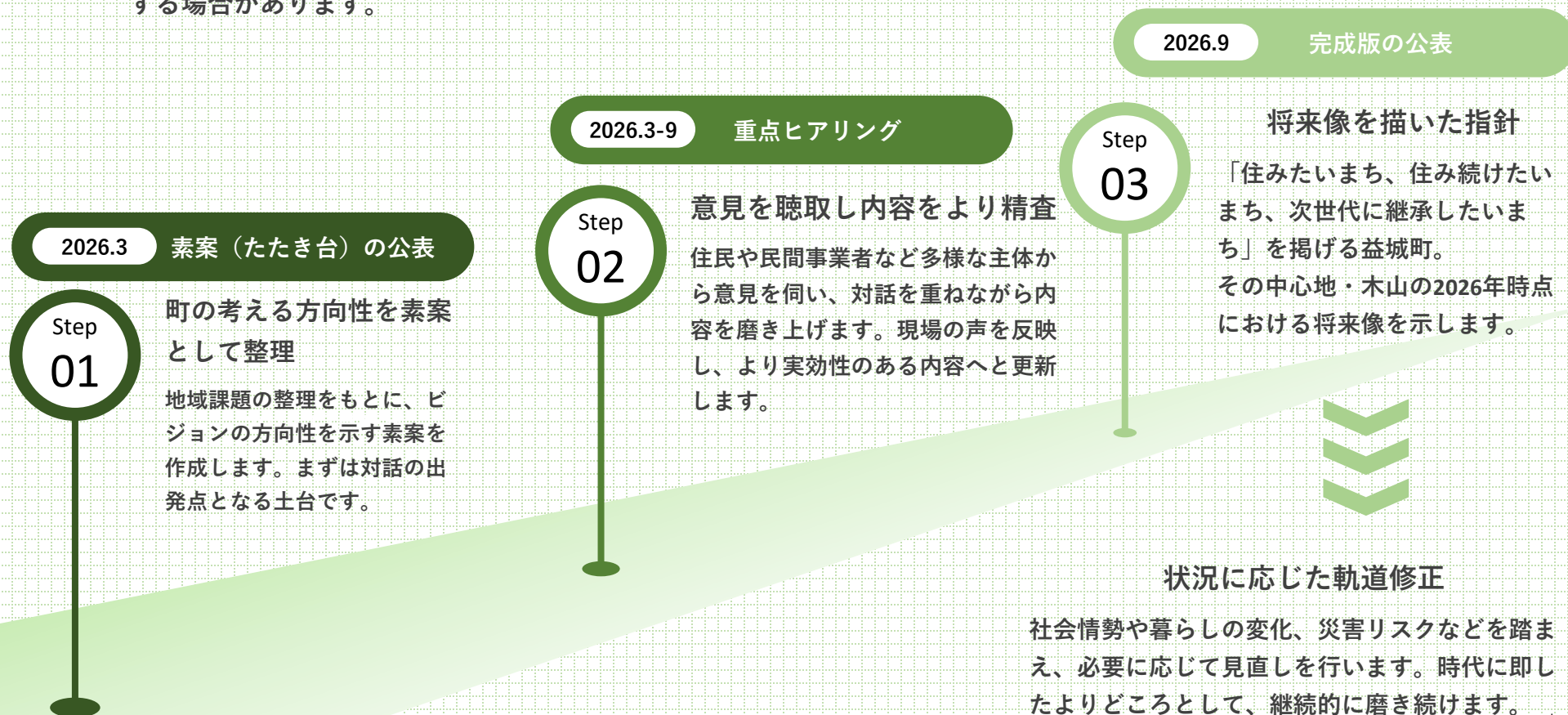
まず木山地区全体の未来像・価値観・連動の考え方を示し、その考え方を踏まえたうえで、木山仮設団地跡地をフィールドとして“暮らしの拠点づくり”の概要（機能、空間像、進め方等）を示しています。



1 策定のプロセス

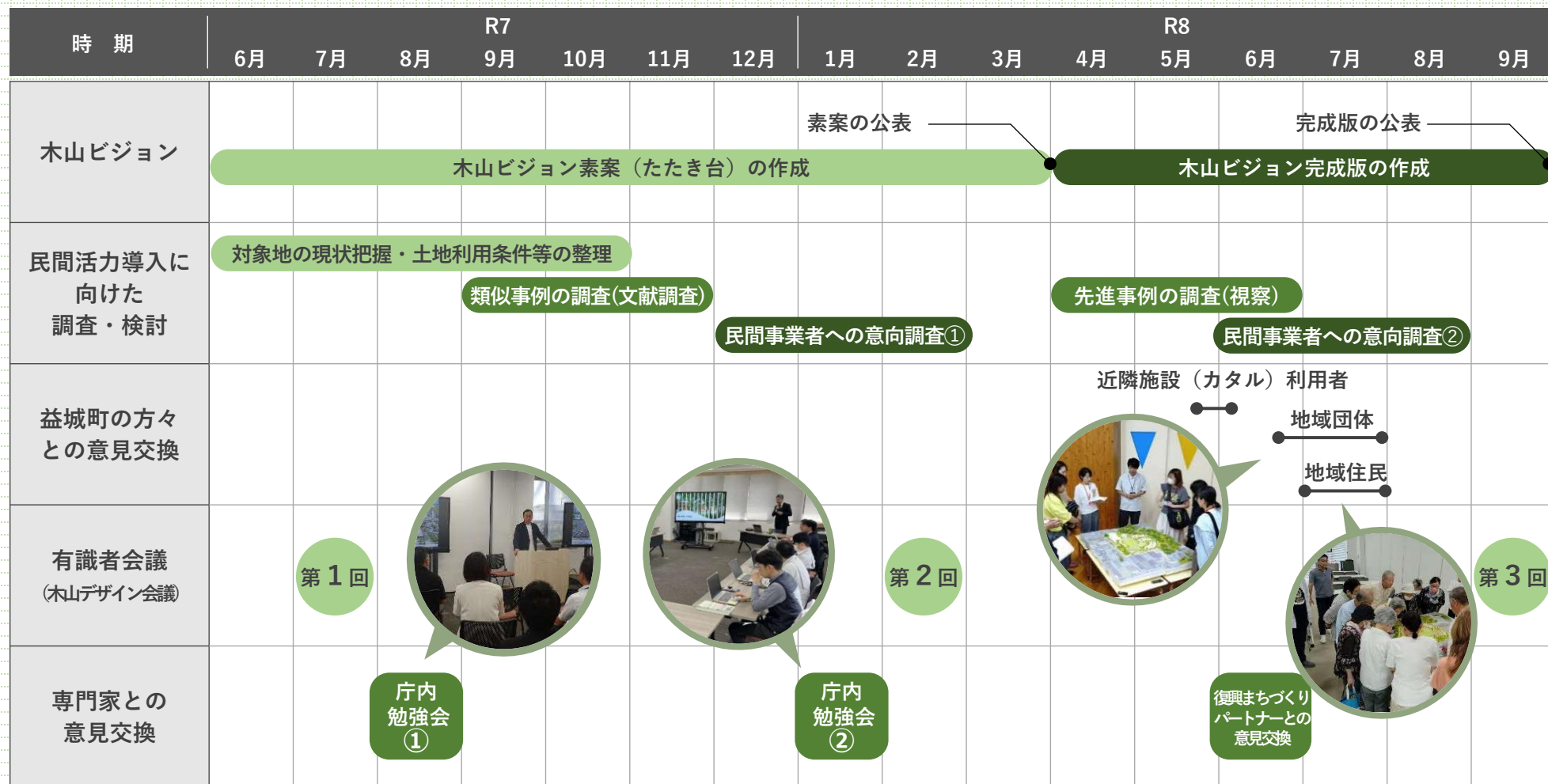
本ビジョンは公表をもって完成となるものではなく、町民・事業者・行政が対話を通じて今後も改良を重ねていく「更新型のビジョン」です。社会情勢や暮らしの変化、災害リスク等を踏まえ、必要に応じて見直し・編集を行いながら、現実在即したよりどころとして磨き続けます。

このため、ビジョン名称には年度を付し（例：木山ビジョン2026）、その時点の状況に合わせてアップデートする場合があります。



1 具体的な検討過程

本ビジョンは、行政のみで将来像を定めるのではなく、町民・民間事業者・有識者等との対話を通じて、内容を段階的に具体化してきました。ここでは、完成版の公表に至るまでの具体的な検討過程を示します。



ビジョンの基本的な考え方

2 まちづくりのキーワード

住みたいまち

住み続けたいまち

次世代に継承したいまち

第6次益城町総合計画第2期基本計画

P3-まちの将来像-より引用

益城町では、第6次益城町総合計画第2期基本計画において、まちの将来像「住みたいまち・住み続けたいまち・次世代に継承したいまち」を掲げています。

この理念は、町の中心部に位置し、都市拠点としての役割を担う木山地区においても大切にすべきものです。

木山地区で目指したいのは、どこにでもある均質的・画一的なまちではなく、木山ならではの個性があふれ、その魅力が地域の価値として磨かれていくまちの姿です。

日常の居場所を起点に、食・学び・遊びがつながり、困ったときには支え合える関係が育まれる。さらに、震災の経験から得た学びを暮らしの力へと変えながら未来へとつないでいく。

こうした暮らしの姿を思い描きながら、木山地区のまちづくりの方向性を整理していきます。

2 次の世代に残したい未来を考える

「自分の子どもたちや孫たちに住んでほしいまち」とは、どのようなまちでしょうか。

便利さや効率だけでは測れない日々の暮らしの豊かさ。顔の見える関係のなかで育まれる安心感。公園や道ばたで交わされる何気ないあいさつや、地域の中で自然に生まれるつながり。他にもさまざまな要素が思い浮かびます。

木山ビジョン2026は、施設整備そのものを主眼とした計画ではありません。ここで暮らす人々の日常の営みやつながりを大切にしながら、この地域の価値をどのように育てていくか、その方向性を示すものです。



2 地域の特性を生かす

木山地区はこれまで、多くの人が行き交い、さまざまな活動が生まれる場所として、また新しい情報や文化、人やモノが集まる地域としての特性を有してきました。

こうした地域の歴史や風土、これまで培われてきた地域特性を大切にしながら、それらの魅力にさらに磨きをかけていくことで、暮らしの質を高めるとともに、今後起こりうる地域課題も見据えた持続可能なまちづくりにつなげていくことが重要です。

また、遊ぶ・学ぶ・働く・食べる・休むといった日々の営みがまちの中で自然に重なり合うことで、「暮らしている実感」や「このまちが好き」という気持ちが育まれることが期待されます。

新しいまちを一からつくるのではなく、木山がこれまで育んできた地域の力を生かしながら、その魅力をさらに高めていくという発想を大切にしていきたいと考えています。

益城町の現在地 / これまでの歩み

3 ターニングポイントとなった熊本地震

まちの可能性を広げ、さらなる成長を目指す“創造的復興”を選択

2016年4月の熊本地震は、益城町に甚大な被害をもたらしました。町の風景も、暮らしも、大きく揺さぶられました。

しかし私たちは、単なる復旧にとどまらず、まちの可能性を広げ、さらなる成長を目指す「創造的復興」を選択しました。それは、震災前の暮らしを取り戻すだけでなく、未来に向けて一歩踏み出すという決意でした。



インフラ基盤の再構築と安全な新住宅地の確保を同時に進めることを目指した復興計画
(平成28年12月)



3 持続可能なまちを目指す、益城町の人口目標

全国的なトレンドとの違い

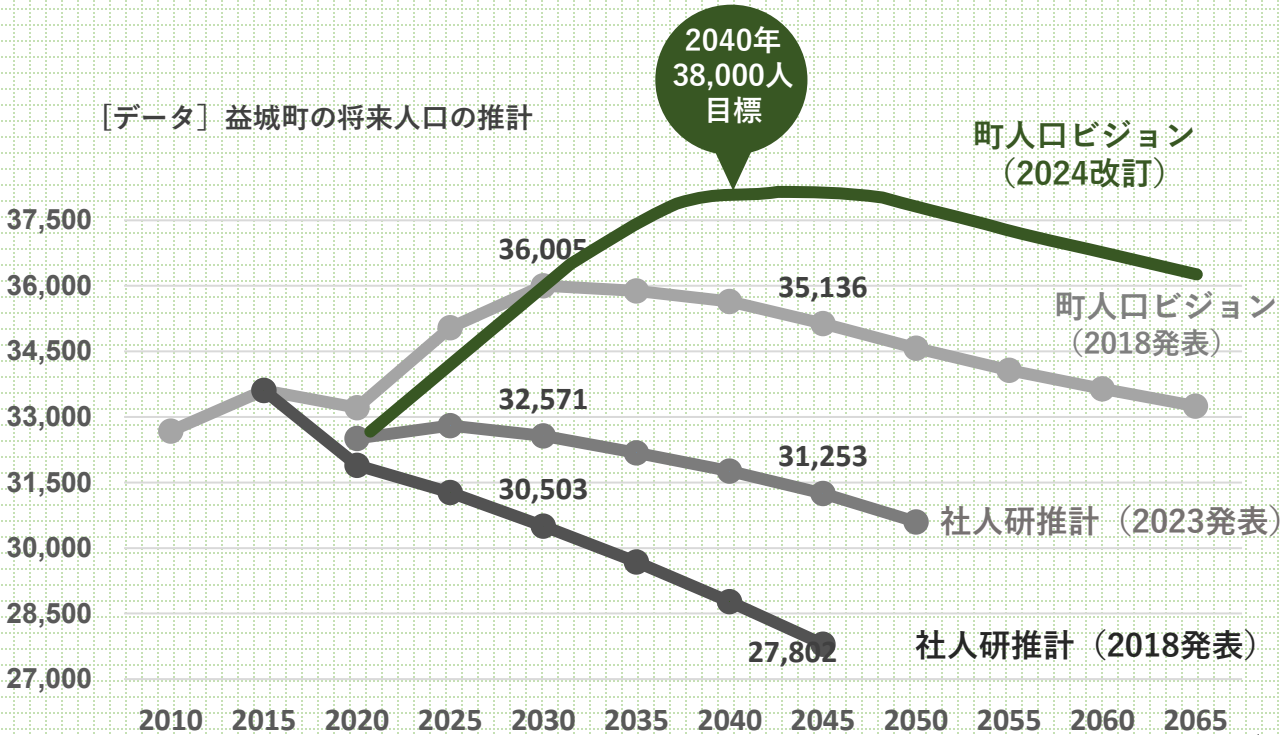
日本全体が人口減少局面に入るなか、自治体の将来可能性に関する分析では、益城町は「自立持続可能自治体」という分類に位置づけられています。これは全国1,700を超える自治体のうち、わずか65自治体（約3.8%）に該当するものです。

人口減少の進行度や構造は地域ごとに異なります。こうした特性を踏まえれば、全国的な縮小モデルを一律に当てはめるのではなく、益城町の実情とポテンシャルに即した政策を考える必要があります。

[データ] 地方自治体『持続可能性』分析レポート
(人口戦略会議)

分類	自治体数	割合
自立持続可能自治体	65	3.8%
ブラックホール型自治体	25	1.4%
消滅可能性自治体	744	43.0%
その他の自治体	895	51.8%
計	1,729	

[データ] 益城町の将来人口の推計



出典：地方自治体『持続可能性』分析レポート
(https://www.hit-north.or.jp/cms/wp-content/uploads/2024/04/01_report-1.pdf)

3 県の事業推進と地域の力による復興の前進

木山地区は創造的復興を目指すうえで欠かせない重要拠点に

安全な新住宅地の確保に見通しが立ったことは、復興を大きく前進させる転機となりました。災害復興ゾーン（現・復興推進エリア）の設定とともに、木山地区は町全体の復興にとっても重要な拠点として位置づけられました。

町単独では実現が難しかった土地区画整理事業や県道熊本高森線の4車線化も、県の力強い推進により大きく進展しました。さらに、交通広場、復興まちづくりセンター“にじいろ”、地域共生センター“カタル”といった震災前にはなかった施設が地域の力により完成するなど、地域の交流や活動の拠点としての環境が整いつつあります。



都市計画道路益城中央線拡幅事業
事業規模：約269億円（2026年3月末時点）

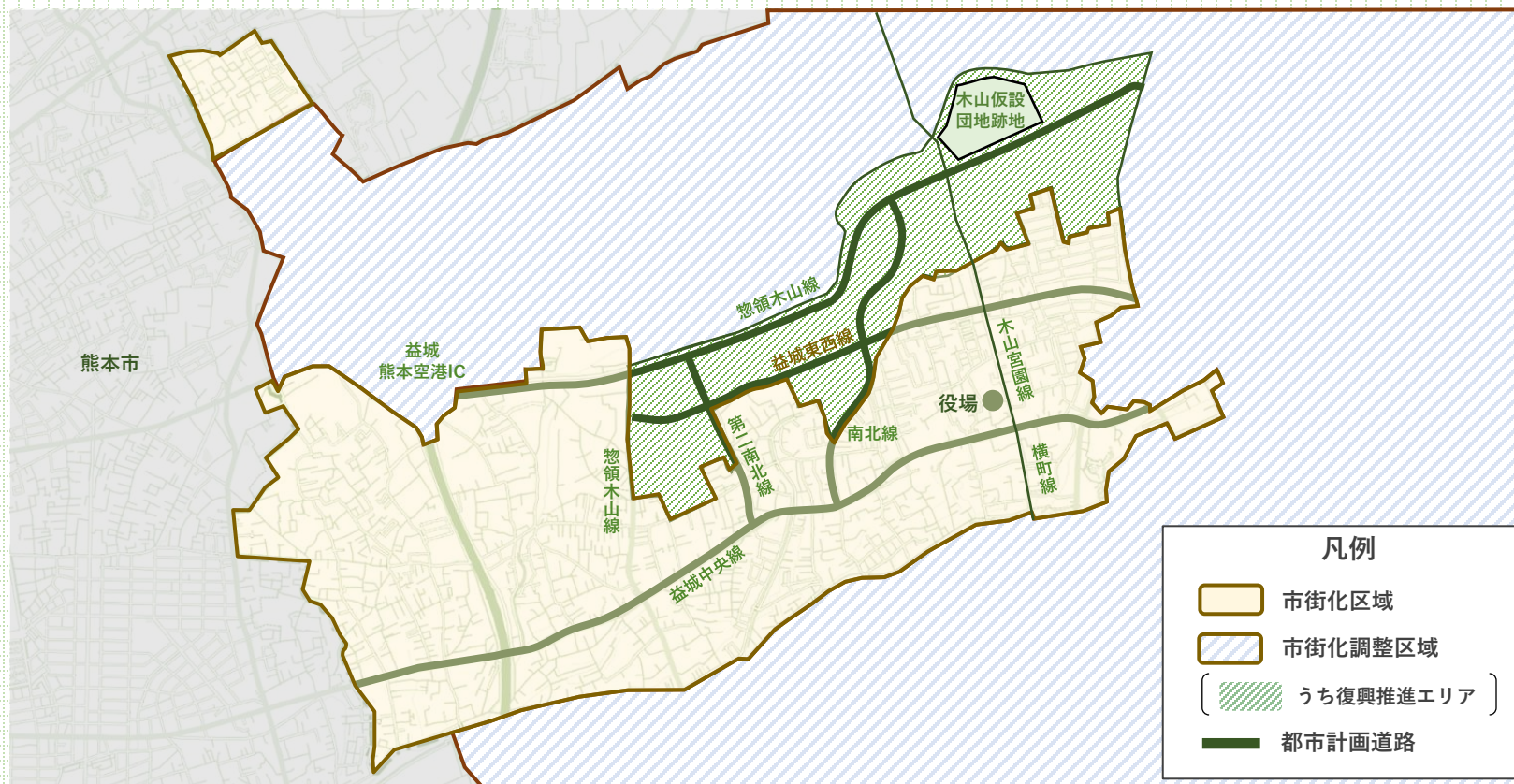


益城中央被災市街地復興土地区画整理事業
事業規模：約210億円（2026年2月末時点）

3 新たな道路ネットワークによる街区形成

復興推進エリアにおいてまちを広げる戦略

復興推進エリアにおいて、都市計画決定された新たな道路のネットワークにより街区の形成を目指しています。この街区は、市街化調整区域にまたがる広がりを持っています。これは、将来の人口増も見据え、まちの成長余地を確保するという政策的な考えのもと取り組んでいるものです。



益城町/木山地区の課題

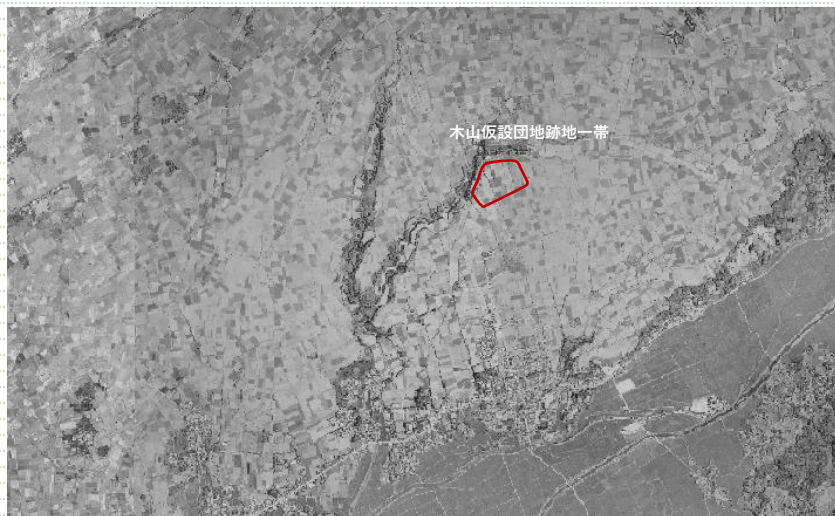
4 木山地区の特性に応じたまちづくり

区域区分が守ってきた価値を生かしながら、地域の実情に合わせてどう調整するか

木山地区では、市街化調整区域によって無秩序な市街地の拡大が抑えられ、コンパクトな市街地と豊かな田園環境が隣り合う、木山地区らしい都市構造が築かれてきました。

都市計画法による区域区分は、こうした都市と田園の良好な関係を守り、計画的な土地利用を図るうえで重要な仕組みです。一方で、地域ごとに異なる課題や暮らしのニーズにきめ細かく対応していくためには、区域区分の趣旨を十分に踏まえながら、その中で活用できるさまざまな制度を地域の実情に応じて適切に組み合わせていくことが重要です。

制度の趣旨を大切にしながら、地域の実情に即した土地利用を実現し、木山地区らしいまちづくりにつなげていくことが求められます。



1950年頃の航空写真。当時は、集落がまばらに点在していた。



2016年頃の航空写真。市街化区域が住宅で埋め尽くされつつある。

4 町内で過ごす場所の不足

日常生活を町外で過ごす人が多いという実態がアンケート調査から浮き彫りに

日常の買い物や飲食、余暇を過ごす場について、町外の施設を利用する割合が高い状況が見られます。町内で「過ごす」「滞在する」場所が十分とはいえず、消費が域外へ流出し、地域内で経済が循環しにくい構造となっています。

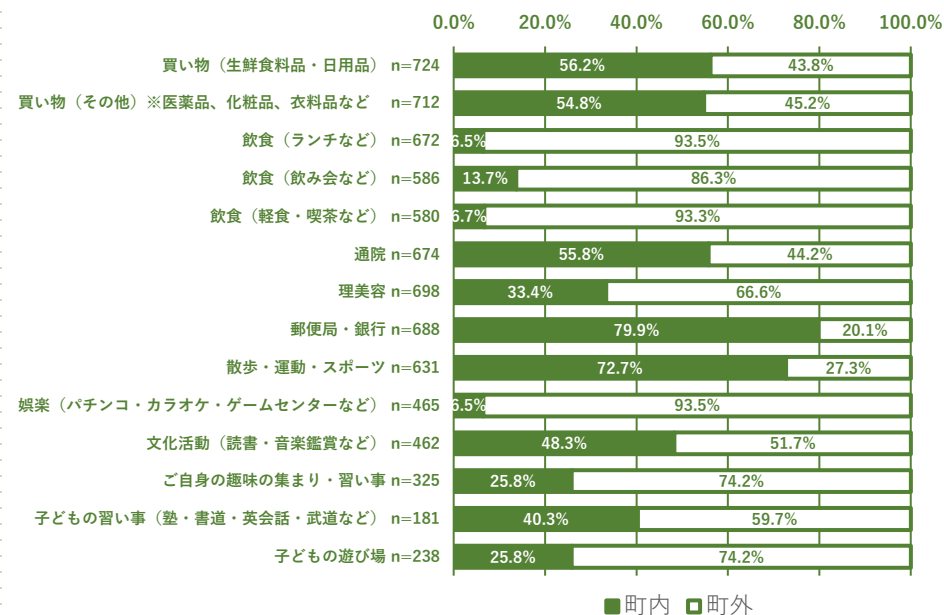
また、各種アンケートにおいても「商業施設を充実させてほしい」という意見は毎回多く寄せられており、町民の強いニーズがうかがえます。

〔第6次総合計画フォローアップアンケート結果〕 R5.10実施

順位	設問	平均点	そう思う (3点)	どちらかといえば そう思う (2点)	どちらとも思わ ない(集計外)	どちらかといえば そう思わない (1点)	そう思わない (0点)
1	気持ちの良い役場窓口対応を受けられるようになっていると思いますか？	2.04	13.66%	48.29%	30.74%	3.53%	3.77%
2	役場の窓口がわかりやすく、スムーズに手続きができるようになっていると思いますか？	1.98	12.62%	48.35%	29.48%	5.19%	4.36%
3	健康の維持・増進のための健（検）診や相談を受けられる環境が整っていると思いますか？	1.94	9.47%	49.19%	30.83%	7.74%	2.77%
...	...	...	...	...	...	...	...
56	公園などの親子で楽しめる環境が充実していると思いますか？	1.03	1.64%	17.66%	32.28%	29.42%	19.18%
57	産業全体の活性化につながるような企業の立地が活発に進んでいると思いますか？	0.99	1.05%	15.91%	39.06%	25.15%	18.83%
58	町内の商工業者が活発に活動できる環境整備が進んでいると思いますか？	0.9	0.58%	9.44%	47.79%	26.34%	15.85%
59	起業・創業しやすい環境づくりが実現していると思いますか？	0.9	0.93%	9.57%	50.29%	22.99%	16.22%
60	新たな農業の担い手が増え、魅力的な農業が行われていると思いますか？	0.87	0.47%	7.24%	50.12%	27.45%	14.72%
61	日々の生活を支える商業サービスが充実していると思いますか？	0.77	1.98%	10.04%	22.75%	33.49%	31.74%

〔地域住民等ニーズ調査〕

普段、買物・飲食・娯楽などそれぞれの目的別に、最もよく使う場所



出典：益城町中心市街地活性化基本計画（令和3年3月）

(https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0034452/3_4452_16307_up_q6m5lb1m.pdf)

4 町外に多くのお金流出、地域内の経済が循環しにくい構造

町内には消費や滞在の場が少なく、結果として支出が域外へ流出

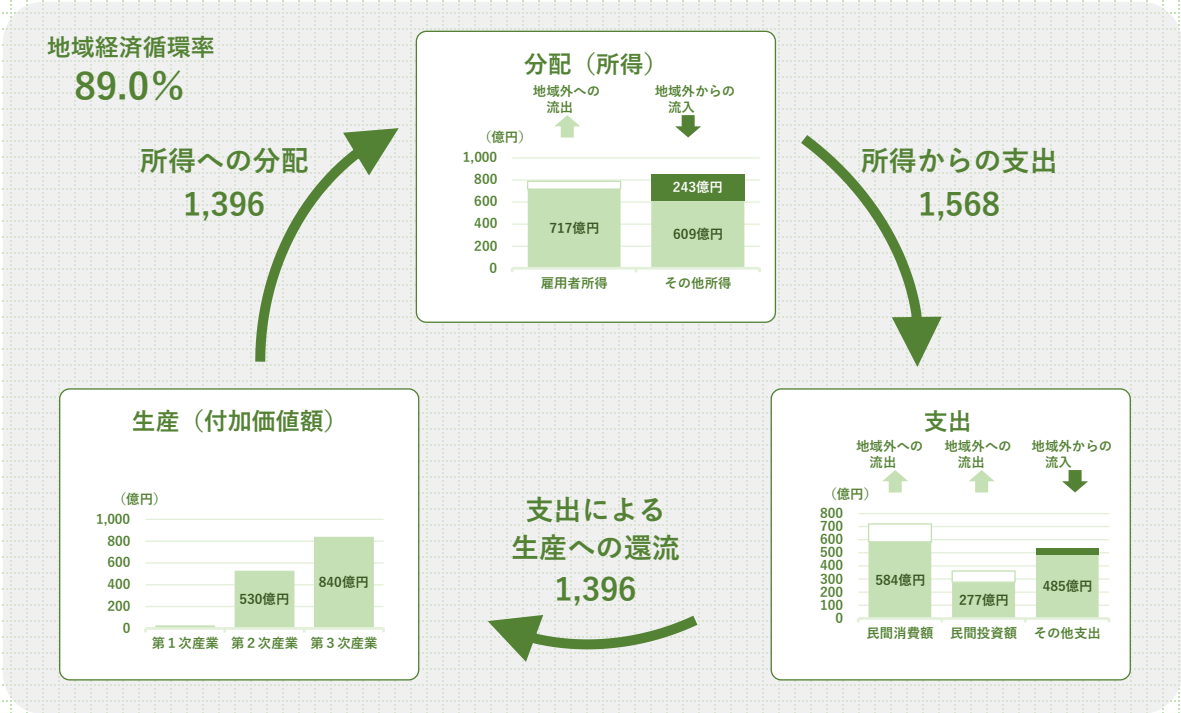
町外への消費流出が続き、地域内で経済が循環しにくい構造が生まれています。地域で使われたお金が町の外へ流れてしまうと、地域の中で新しい仕事や活動も生まれにくくなります。

地域で稼ぎ、地域で使い、地域で回す。その循環を取り戻すことが、まちの持続可能性にもつながっていきます。

支出流出入率 2022年

	民間消費	民間投資	その他支出
支出流出入率	-19.0%	-23.4%	10.2%
支出流出入率順位	1,387位	1,078位	268位

[地域経済循環分析]
2022年/指定地域:熊本県益城町



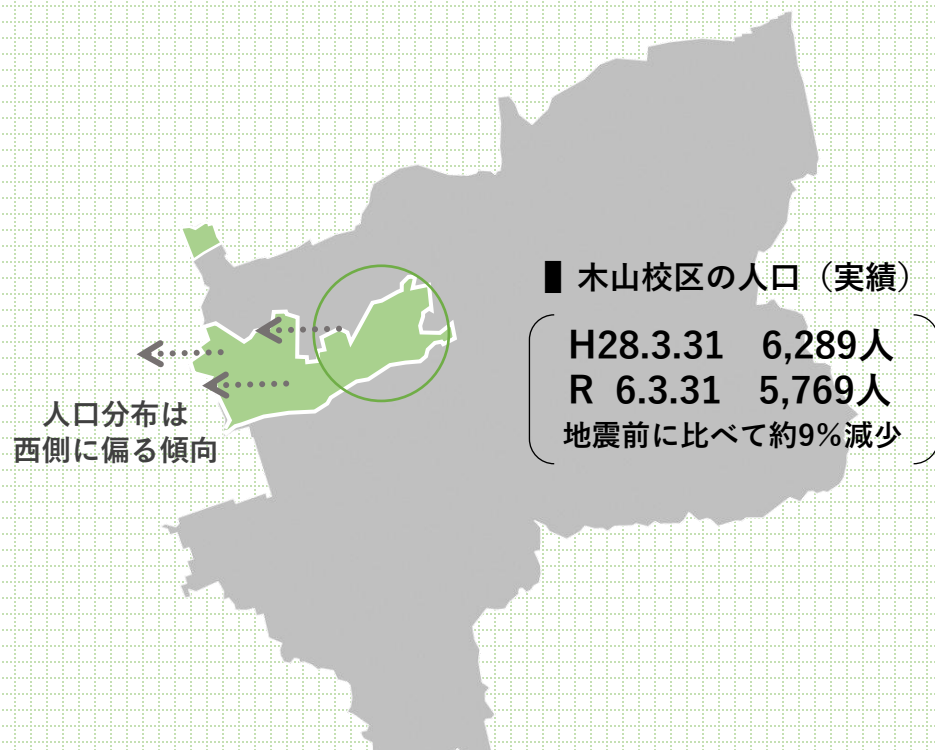
出典：地域経済分析システム RESAS
(<https://resas.go.jp/region-cycle-diagram/?tab=0&pref=43&city=43443&year=2022&level=city>) | 19

4 復興の成果を木山地区の活力へつなげるための課題

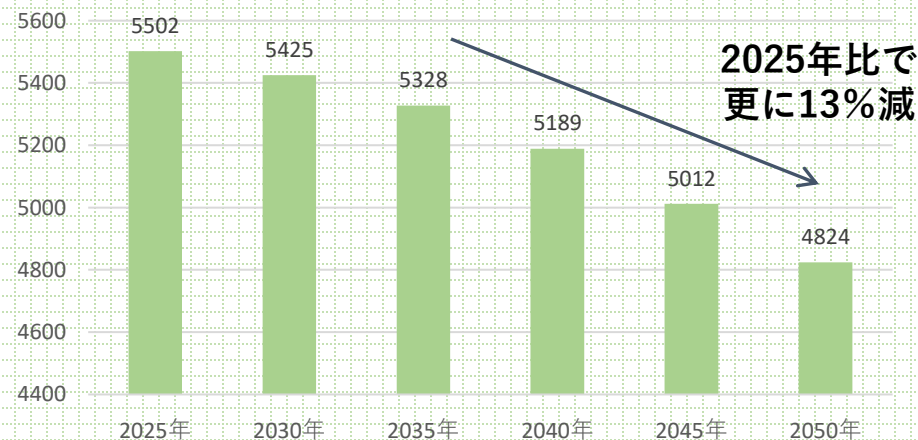
町全体の人口は回復傾向にある一方で、木山地区では人口減少の傾向が続いている

町全体の人口は回復傾向にある一方、木山地区では人口減少が続いています。このままでは子育て世代の流入が進まず、商店の減少や利便性の低下を招き、新たな活力が生まれにくくなる懸念があります。復興で整備した都市基盤を最大限に生かし、持続可能なまちづくりへとつなげていくためにも、現状の傾向に歯止めをかける必要があります。

本町の都市構造の観点からも、町の中核を担う木山地区の活力を維持・向上させていくことが不可欠であり、行政・町民・民間が一体となって魅力を高めていく取り組みを進めます。



■ 木山校区の人口（見通し）



※国土技術政策総合研究所将来人口・世帯予測ツールV3（R2国調対応版）を基に作成

4 創造的復興の先へ — 創造的なまちの中心地を目指して

次世代に継承したいまちになるために

熊本地震の発災以降、復旧・復興の過程では、行政、地域住民、企業、大学、ボランティア団体など、これまで関わりの少なかった多様な主体が復興活動に参画しました。

また、全国各地からの支援や新たな活動の流入によって、地域の中にこれまでにない人のつながりや取り組みが生まれました。

こうした過程を通じて、人材（ヒト）、地域資源（モノ）、活動や取り組み（コト）が相互に結びつき、新しい連携やプロジェクトが生まれるなど、地域の中に新たな動きが広がっています。

例えば、復興支援をきっかけに地域外の人材が継続的に関わるようになった事例や、地域の資源を生かした新しい活動や事業が立ち上がるなど、復旧にとどまらないさまざまな取り組みが各地で見られています。

このように、災害からの復旧の過程で生まれた人のつながりや新しい取り組みを一時的なものに終わらせるのではなく、地域の風土として根付かせ、将来的には地域の文化や価値として育てていくこと。それこそが、創造的復興の先にある姿の一つではないでしょうか。

Chapter

5

目指したい姿

5 3つの拠点が支え合う、木山のまちづくり

都市拠点を核に、仮設団地跡地拠点・運動公園拠点が連携するエリアデザイン

木山のまちづくりにおいて重要なのは、都市機能を集約した「都市拠点」において、町にとっての“心臓部”をつくることと考えています。人が集い、働き、消費し、交流する中枢機能を担う場所として、その役割を明確に位置づけます。

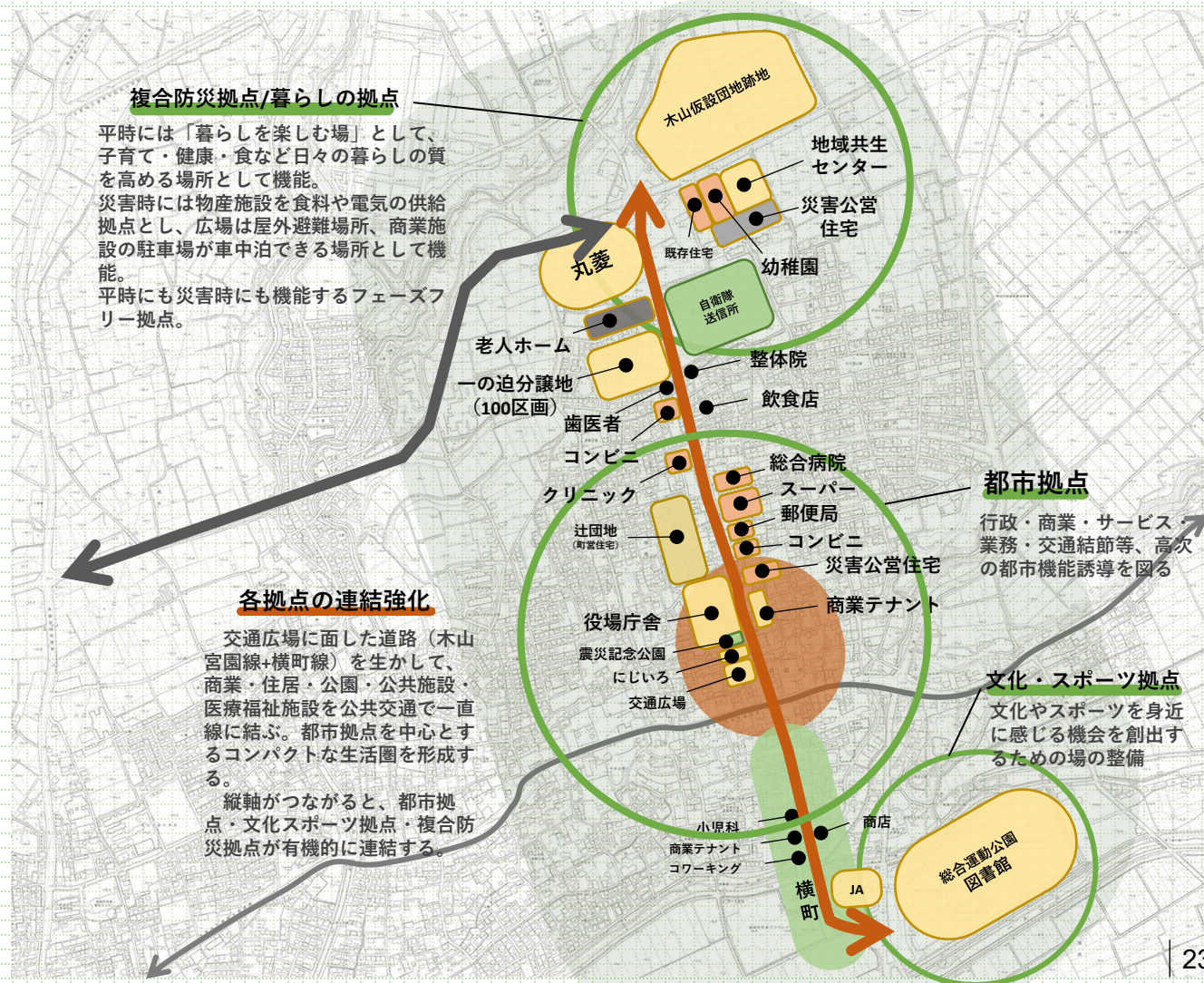
あわせて、木山仮設団地跡地では、災害時には防災機能を発揮し、平時には町民の心のよりどころとなる複合防災拠点を目指します。

さらに、運動公園は文化・スポーツ・レクリエーションの拠点として、町民の活動と交流を支える場とします。

これら3つの拠点がそれぞれの役割を果たしながら相互に補完し、相乗効果を生み出します。その連携軸として、役場前を通る木山宮園線を整備し、拠点間の一体性と回遊性を高めていきます。

さらには、4車線となった県道熊本高森線を通じて、その効果を町の中心市街地に波及

させていきます。



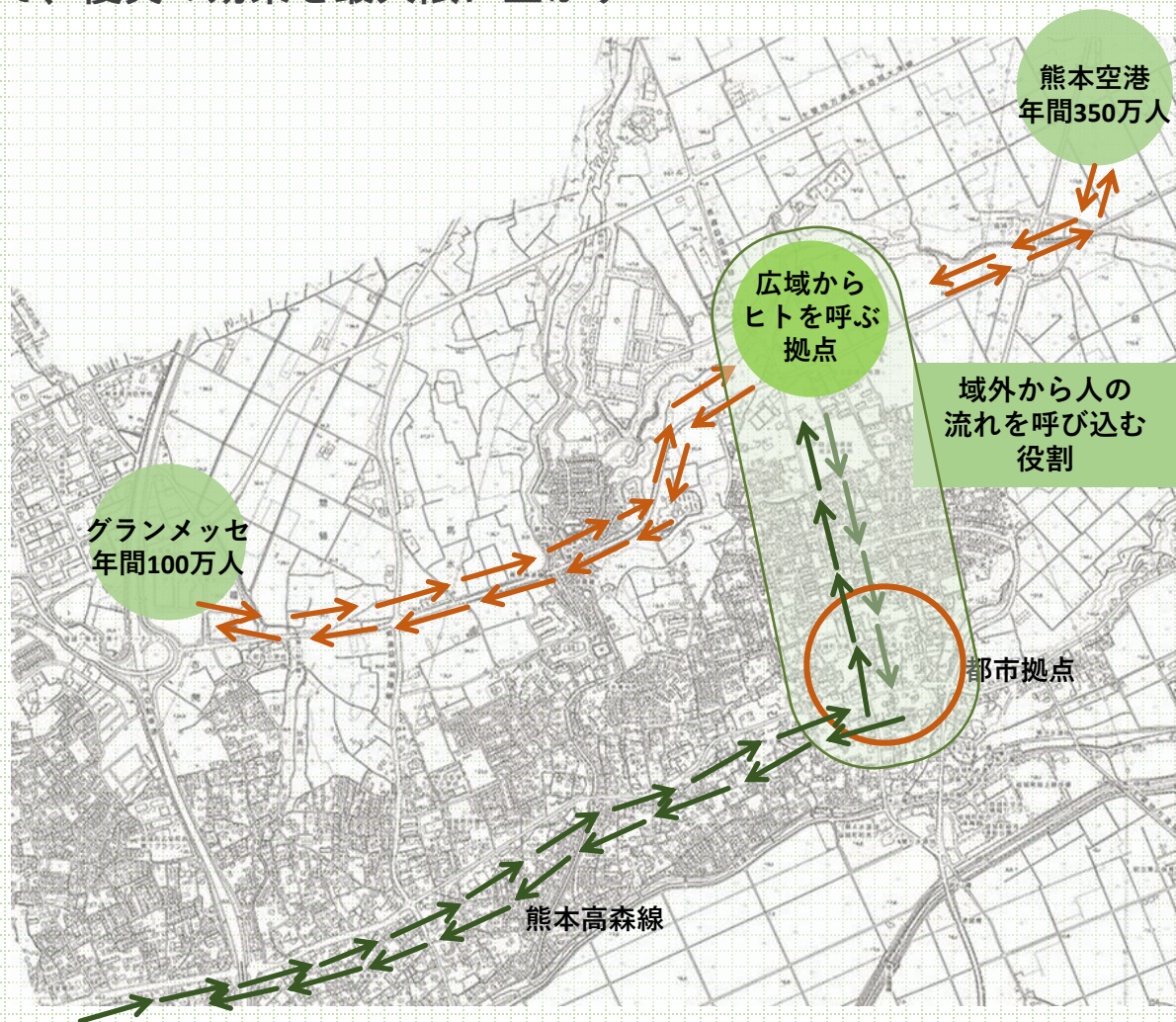
5 木山に人の流れを呼ぶ、新たな交流の拠点

木山に目的地をつくることで、復興の効果を最大限に生かす

木山仮設団地跡地を、人の流れを都市拠点へ導く結節点として位置づけます。阿蘇くまもと空港やグランメッセ熊本といった広域拠点との接続を生かすことで、都市拠点に集約した機能の利用を高め、滞在と消費を生み出します。

その結果、ヒト・モノ・カネの集積が進むことで、県道熊本高森線沿道における土地利用の高度化や機能転換が促され、まちのさらなる活性化へと波及していきます。

また、ヒトの流れを呼ぶ目的地を木山地区につくることは、県道熊本高森線の利用者増加など復興事業の成果を最大限に生かすことにもつながります。



5 町全体の復興を牽引する“都市拠点”

高次都市機能が集まるまちの心臓部

都市拠点は、益城町での暮らしをより便利で快適にするための原動力となる場所です。役場や商業施設、医療、交通など、生活に必要な機能を集めることで、町の中で日々の用事が済ませられる、コンパクトで回遊しやすいまちの形を目指します。機能が分散するのではなく、使いやすくまとまることで、暮らしやすさが高まります。

都市拠点では、現在進めている土地区画整理事業を軸に、必要な場所に必要な都市機能を配置していきます。都市拠点を整えることで、交通や商業、公共機能など都市としての基盤が確立されていくものと考えます。

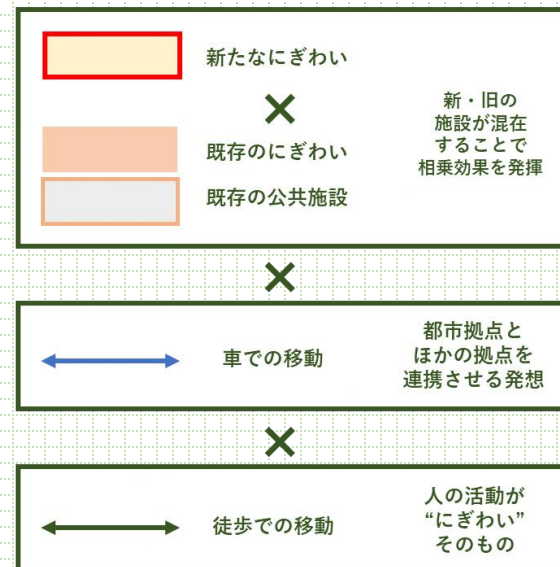
一方で、都市拠点に近接する木山仮設団地跡地一帯は、農・食・健康・防災などをテーマに、新しい暮らし方やコミュニティづくりを実践する場として活用していきます。

都市拠点におけるにぎわいづくりビジョン

2018年12月公表

場と連携した取組で、人の動きを作り出す

にぎわいは人の動きによって生まれます。この人の動きは、場の存在だけでは作り出せません。“木山まち”でも、地域住民によるイベントの開催や未来に向けたプロジェクト活動、交通機関の充実など、場を利用する人々による、場と連携した取組が必要不可欠です。もちろん、行政も、場の利用者として関わるとともに、地域の活動への支援等を積極的に行っています。



5 都市拠点と木山仮設団地跡地の役割分担

－ まちの拠点にも、それぞれの役割がある －

都市拠点は、いわば「心臓」のような役割を果たします。

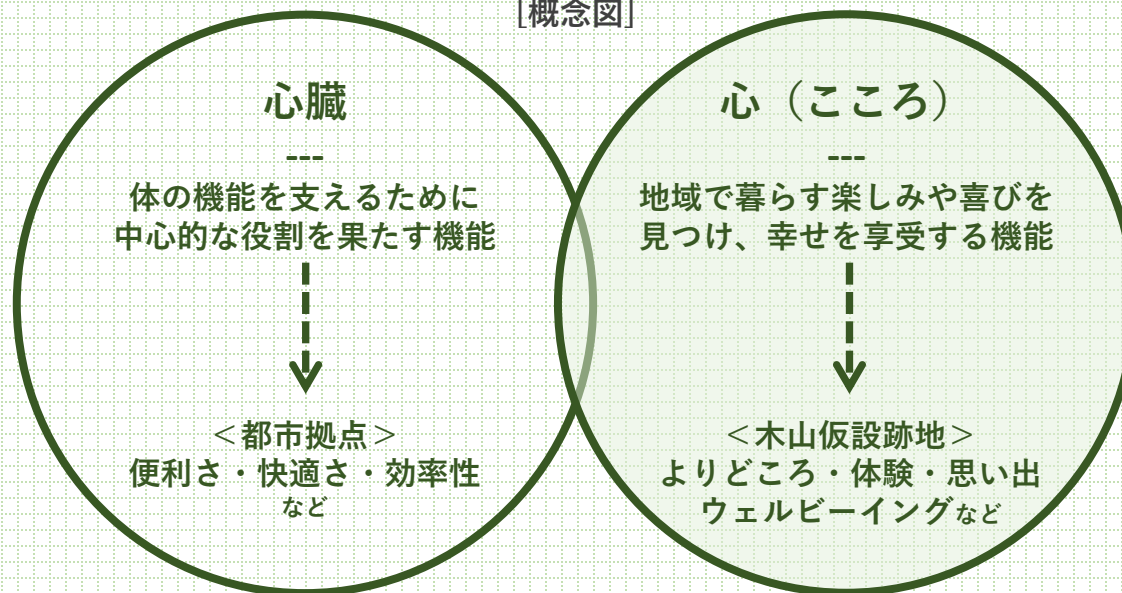
体の機能を支える心臓のように、都市機能を集約し、まち全体を健全に動かすための中枢的な役割が期待されます。

一方、木山仮設団地跡地では、「心（こころ）」のような役割を果たす場所を目指します。

地域で暮らす楽しみや喜びを育み、安心やつながりを感じられるような、心のよりどころとなることが期待されます。

拠点にはそれぞれ異なる機能がありますので、それぞれの役割を明確にし、互いに補い合うことで、拠点間の相乗効果を生み出していくことも重要です。

[概念図]



木山仮設団地跡地における 暮らしの拠点づくり計画

木山ビジョンを踏まえた、木山仮設団地跡地のあり方

6 コンセプト

都市の縁側

まちと自然、人と人、日常と非日常を、ゆるやかにつなぐ場所

市街化区域

都市的な暮らし・利便性

市街化調整区域

農・自然の環境・ゆとり



熊本中心部 ◀..... 木 山▶ 阿蘇地域

縁側は、家の一部でありながら、外にもひらかれた場所です。完全な内でも外でもない、その曖昧さが、人を迎え入れ、自然と交流を生み出します。

木山地区は、熊本都市圏の“縁”に位置し、市街化区域と市街化調整区域が共存している、いわば「都市の縁側」のような地域ではないでしょうか。

少し車を走らせれば都市的な便利さが身近にありながら、その先には農や自然の風景が広がる、いわば都市と自然が重なり合う風土こそが“木山らしさ”の由縁だと考えています。

木山仮設団地跡地が、まちと自然、人と人、日常と非日常などを、ゆるやかにつなぐ場所になってほしい。そしていつか、地域の方々にとっての「よすが（縁）」となることを願っています。

仮設団地の
記憶の継承

住戸の配置を工夫した小路、ふと腰掛けられるベンチ、人が集う「みんなの家」。
暮らしの動線の中に、立ち話や見守り、交流が生まれる小さな居場所をつくることで、コミュニティが育まれてきました。

木山仮設団地跡地で目指す新しい住宅地でも、その知恵を震災時だけのものにせず、これからのまちづくりの財産として継承していきたいと考えています。

孤立を防ぎ、つながりを育む工夫

みんなが集まれる
「みんなの家」

ふと腰掛けられる
ペンチ

自然と顔を合わせる
きっかけ

その知恵を継承し

新しい住宅地の“縁側”へ

6 都市の縁側を形作る 7つのテーマ



01 農

暮らしのすぐそばに農を感じられる環境

<イメージ>

- ・生産者と消費者が触れ合える場づくり・学びの場
- ・生産者の新鮮な農作物を購入できる産直施設
- ・農業の担い手不足を解消する新たな仕組み

07 住まい

オープンスペースや緑に恵まれた良質なベッドタウンへ

<イメージ>

- ・オープンスペースや緑に恵まれた住環境
- ・都市と農村のバランスの取れたエリア
- ・子どもが遊びまわられる住棟配置
- ・経年を味わいに変える工夫

06 教育

学びの素材が多く、多様な教育にアクセスできるまち

<イメージ>

- ・農や食、健康、防災等の分野における学びの場の提供
- ・益城町の将来を担う創造的な人材育成、マッチング支援
- ・自然体験やプロジェクト型の学習を取り入れたオルタナティブ教育



05 防災

平時と災害時をつなぐ、いざというときのよりどころ

<イメージ>

- ・被災地として次世代への震災の記憶の継承
- ・日常の交流・利用から生まれるフェーズフリーの思想を取り入れた防災・公園機能
- ・自然や農を体験しながらの防災コンテンツ整備
- ・次世代の環境負荷を抑えるエネルギーの地産地消



02 食

農と暮らしをつなぎ、人が集まるきっかけをつくる

<イメージ>

- ・地元産の新鮮な野菜、果物を使ったレストラン・カフェ、
- ・料理家や生産者を招いた料理教室、食育ワークショップ、
- ・生産者と消費者が顔を合わせるファーマーズマーケット

03 暮らし

都市と農村が調和する豊かな暮らしへ

<イメージ>

- ・友人や家族と余暇を過ごせる公園
- ・緑豊かなランドスケープ
- ・衣食住を満たす生活利便施設



04 健康

04 健康

心身の健康に加え、社会的なつながりが育まれる環境

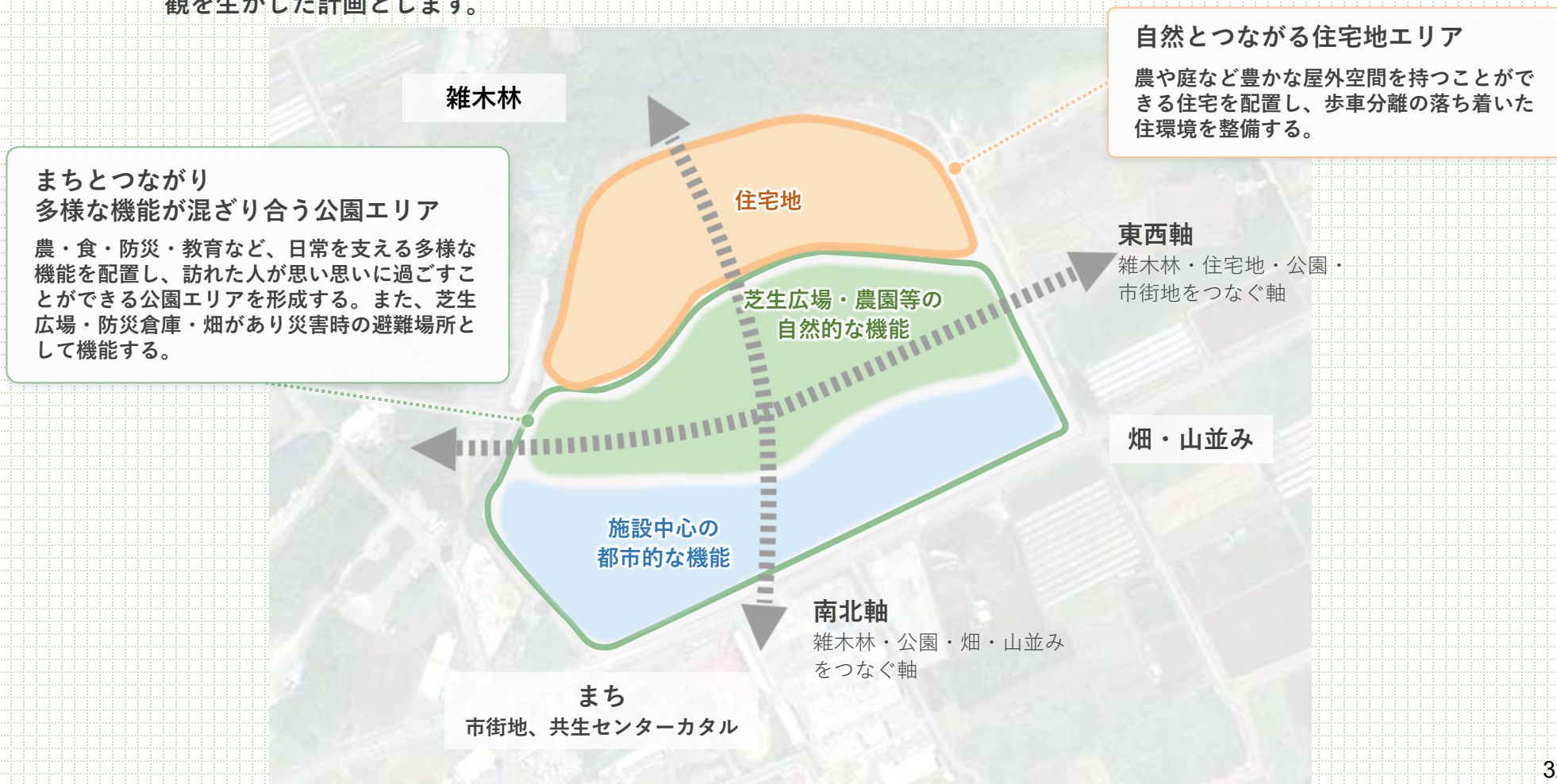
<イメージ>

- ・健やかなライフスタイルへと行動変容を促す環境
- ・身体の健康・心の健康・社会的なつながりの3つが整うウェルビーイングなエリア



6 まちと自然、人と人をゆるやかにつなぐ空間づくり

木山仮設団地跡地においては、『都市の縁側』『仮設団地の記憶の継承』というコンセプトを大切にし、具現化するための空間づくりを行います。まちと自然、人と人をゆるやかにつなぐ場となるよう、まちとの接点や自然景観を生かした計画とします。



エリアの将来イメージ

7 エリアの将来イメージ

この図面は、将来の方向性をわかりやすく共有するためのイメージです。今後の基本設計や地域の方々・民間事業者との対話を通じて、計画の磨き上げや実現性の検証を図るため、内容が変更となる可能性があります。

公園エリアのイメージ

農家レストラン



産直施設



カフェ・ショップ



非常時の防災拠点



フラットバス

住宅地

芝生広場

農家レストラン、産直施設、
カフェ・ショップなど

農園

防災倉庫

調整池

パークセンター

駐車場

駐車場

地域共生センター
“カタル”

多様な活動・交流例

農園での体験



食育



マルシェ・朝市



住宅地エリアのイメージ

コモン広場と緑のある住宅地



ウェルビーイングな暮らし



公園と住宅をつなぐ緑



7 “食と農”からはじまる、豊かな暮らし

イメージ①

産直施設や農家レストランなどを中心とした“食”と“農”の拠点整備

「食」と「農」は私たちの暮らしの基盤を作り、次の世代へと受け継がれる大切なものです。
土地の風土が育む食文化は、その地域の個性となり、人々を惹きつけます。
食が豊かな場所は、地域に喜びをもたらし、次世代の教育にもつながります。

木山地区では、産直施設を中心に、食と農の価値を学び、受け取り、伝える循環を創りたいと考えています。
産直施設は地域の農産物を直接届ける場所となり、農家レストランでは食と農のつながりを実感できる場を提供します。

また、スマート農園（市民農園）を整備することで、地域住民が農業を体験し、持続可能な農業への理解を深める機会を作り出します。このような取り組みを通じて、地域の魅力を次世代に引き継いでいきます。



7 ウェルビーイングな暮らしが幸せをつくる

イメージ②

心も体も健康なライフスタイルを志向するコミュニティを目指す

私たちが目指すのは、「ウェルビーイングな暮らし」が当たり前になるまちです。心も体も健やかに、自分らしく日々を楽しめること。その積み重ねが、人生の幸福度を高めていくと考えます。

理想は、健やかな日々を重ねながら、最期までその人らしく、人生をまっとうすることです。

これは個人にとっての幸せであると同時に、地域社会の活力を維持し、まち全体の持続可能性を高めることにも直結します。

そのために必要なのは、一人ひとりが無理なく健康づくりに取り組めるよう、まち全体で環境を整えることです。

日常の中に、自然と歩きたくなる動線、地元の新鮮な食材を選びたくなる環境、人とつながりたくなる居場所を組み込むことで、暮らしそのものを“健康的な選択がしやすい設計”へと変えていきます。

さらに、ライフサイエンスやヘルステックの活用により、データに基づく健康管理や予防の仕組みも取り入れ、科学と地域の力を融合させます。一人の健康づくりではなく、まちぐるみのウェルビーイングへ。

木山から、持続可能な健康コミュニティのモデルの創出を目指します。



7 心のよりどころとなる場所や空間づくり

イメージ③

日常に開かれた、滞在したくなる公園

私たちが目指すのは、単なる公園整備ではありません。町民一人ひとりにとっての「心のよりどころ」となる場所をつくることです。

目的がなくてもふらっと立ち寄れる。誰かと約束しなくても、そこに行けば安心できる。子どもがのびのびと遊び、大人がくつろぎ、高齢者が穏やかに過ごせる。そんな一日中過ごせる公園を、まちのランドマークとして育てていきたいと考えています。

遊具や広場だけではなく、木陰、ベンチ、カフェのような居場所、イベントや日常の活動が重なり合う空間設計によって、自然と人が集まり、つながりが生まれる場へ。この公園は、にぎわいを生む空間であると同時に、静かに心を整える場所でもあります。まちの未来にとって欠かせないオープンスペースの創出を目指します。



7 もしものときも支える、フェーズフリーな公園

イメージ④

平時はいこいの空間、非常時は命を支える拠点へ

この公園が目指すのは、日常と非常時を分けない「フェーズフリー」の考え方です。平時には、子どもたちが遊び、大人がくつろぎ、人が集い、にぎわいが生まれる場所。カフェや産直施設を備え、一日ゆっくりと過ごせる心地よい空間として、暮らしに寄り添います。

そして非常時には、地域の安全を支える拠点へと機能を切り替えます。防災設備や備蓄、広場空間を生かし、災害時の避難・支援・情報共有の場となります。特別な「防災施設」をつくるのではなく、日常の豊かさそのものが、いざという時の強さになる設計へ。にぎわいと備えを両立させることで、地域のレジリエンスを高め、町全体の安心感を底上げしていきます。

この公園は、楽しむ場所であると同時に、守る場所でもあります。日常も非日常も頼れる拠点を目指します。



Chapter

8

事業の実現に向けて

8 事業実現に向けたスキーム案

“復興の象徴”から“創造の拠点”へ

事業実現に向けては、より魅力的な“創造の拠点”を形成するため、町だけでなく、民間事業者や関係団体等と連携した事業スキームを構築し、事業を推進していきます。

■公園エリア

- 都市公園として町が整備
- Park-PFI制度を活用し、民間事業者を公募
- 民間事業者による一部公園施設の整備や公園全体の一体的な運営による魅力向上

■住宅地エリア

- 住居系の地区計画を策定
- 町と民間事業者で連携し、事業を推進（造成、開発、分譲）
- 段階的に整備

■アクセス性

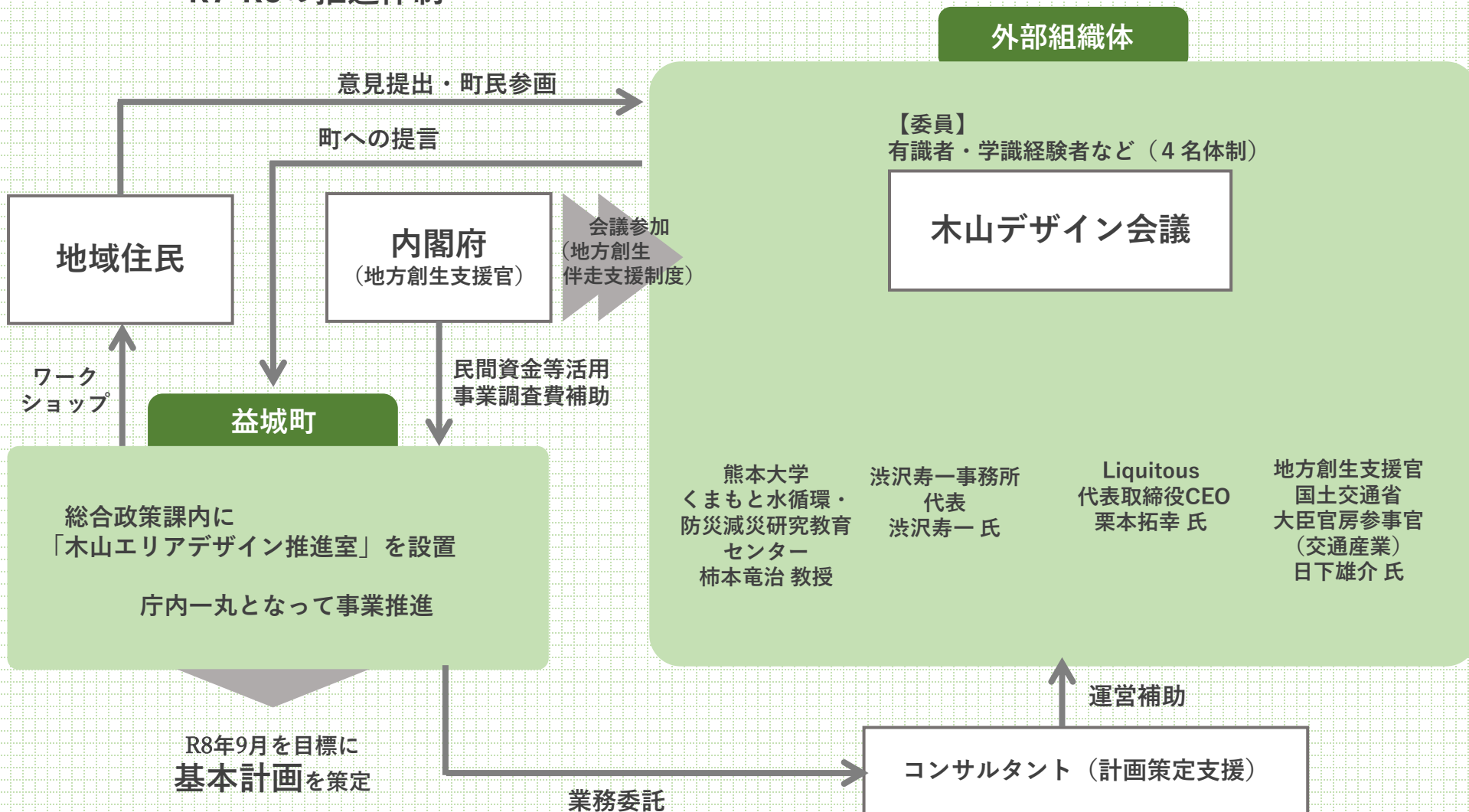
- 公園や住宅地へアクセスしやすい地区内幹線道路や駐車場の計画



※あくまで現段階でのイメージであり、関係機関や民間事業者との対話を重ねながら適切な事業スキームの検討を進めます。

8 事業実現に向けた推進体制

R7-R8の推進体制



8 実現までのロードマップ

		令和7年度 (2025年)	令和8年度 (2026年)	令和9年度 (2027年)	令和10年度 (2028年)	令和11年度 (2029年)	令和12年度 (2030年)
都市公園	調査・計画	基本計画		基本設計	実施設計	造成・整備	
	用地の確保	買収(公社)・仮登記			本登記 (予定)		
	許認可手続き	関係機関との協議		都市公園 公告			
Park-PFI (便益施設)	公募設置等の方針		公募 準備	公募手続			
	民間事業者の選定		サウン ディング	協定の 締結	設置許可 の付与		
	整備					施設の整備	
住宅地	設計・造成	基本計画		基本設計	実施設計	粗造成	
	許認可手続き	関係機関との協議			許認可手続き		
	土地売却・賃借					公募⇒事業者決定	分譲等

※現段階でのおおまかなスケジュールであり、今後変更する可能性があります。



制作：
益城町総合政策課
木山エリアデザイン推進室

